

第 11 回 11 月 19 日

生きることは学ぶこと・学ぶことは生きる喜び～学び続ける喜びを訪問カレッジで～

重度障害者・生涯学習ネットワーク代表 飯野 順子 先生 礼状風レポート

国際医療福祉大学 医療福祉学研究科 修士課程 医療福祉経営専攻

医療福祉ジャーナリズム分野 1 年 村松恵

インクルーシブの距離と母性の影—訪問カレッジの実践から再考する、生涯学習と共生の可能性—

I. はじめに—母性の影と向き合うために

飯野照子先生

過日は、障害のある人々の生涯学習と訪問カレッジの制度化に関するご講義を拝聴し、誠にありがとうございました。先生のお話は、単なる知識の獲得を超えて、私自身の内面と研究の原点を深く揺さぶるものとなりました。

医療的ケアを必要とする息子を育てる中で、私は「この子はあなたを選んで生まれてきた」「大変ね」といった善意の言葉を幾度も受け取りました。その言葉は優しさである一方で、私が抱えてきた怒りや疲弊、混乱を“語り直し”、私自身の複雑な感情を封じ込めてしまうような息苦しさをもたらしました。

その奥底には、「母性とは恐ろしいものだ」という実感があります。守りたい、傷つけたくないという思いは、時に過剰な警戒となり、子どもの世界を狭めてしまう可能性すら孕んでいます。

この“母性の影”を丁寧に見つめ、言語化しなければ、私は母としても研究者としても前に進めない。

この内的課題を抱えながら大学院に進学した私にとって、先生が授業で述べられた「インクルーシブには、まだまだ遠いのよ」という言葉は、現実の厳しさを示すだけでなく、私自身の視野の偏りを鋭く照射するものでした。本来なら深く意味を伺うべきところを、私は恐れから一步を踏み込めませんでした。この反応そのものが、私が向き合うべき「母性と研究の交差点」にほかなりません。

II. 息子が経験した“子ども同士の世界”—私がインクルーシブを諦めない理由

それでも私は、インクルーシブ教育の可能性を捨てることができません。その理由は、息子が小学校 6 年間で経験した、かけがえのない「子ども同士の世界」にあります。

息子は、診断名や療育歴による分断を経験することなく、クラスの一員として日常を過ごすことができました。そこには、大人が管理した“優しい世界”ではなく、子どもたちが生み出す固有の関係性のダイナミクスがありました。

言ったり言われたり、やったりやられたり、時に衝突し、また翌日には何事もなかったように一緒に笑っている。こうした関係の往復は、子どもの成長に不可欠な社会的経験であり、まさに「共にいること」の本質を体現していました。

私自身は常に「傷つけられないか」と身構え、息子を守ろうと警戒していました。しかし、現実には息子は“言われる側”であると同時に“言う側”でもありました。この事実は、私が母性の名のもとに作り上げていた

「守るべき存在」というイメージを大きく崩し、息子自身の主体性を鮮明に示してくれました。

この経験があったからこそ、私はインクルーシブの実現可能性を、理念としてではなく実体験として信じ続けたいのです。子ども同士の関係は、大人の想像を遥かに超えた可能性を持ち、そこにこそ共生社会への大切な鍵があると実感しています。

Ⅲ. 訪問カレッジが示す、生涯学習の射程と制度化の意義

先生がご紹介くださった訪問カレッジの実践は、インクルーシブ教育を“学校”という枠から解放し、「生涯にわたり学び続ける権利」という視点へと大きく開いてくれるものでした。

在宅や病院で生活する重度障害者の方々が、「大学生」というアイデンティティを持ち、学びを通して自己を構築していく姿は、教育の本質が「成長の継続」であることを強く示しています。視線入力や多様なスイッチによる創作活動、病院であっても継続される音楽制作、季節や文化を取り入れた教材、作品発表による地域社会との接続など、学びが“生”のあらゆる手触りと結びついていました。

さらに、こうした取り組みを慈善や善意に依拠させないために、居宅訪問型の学習支援を制度として位置づけようとする動きは、教育を権利として再定義するものであり、生涯学習政策の方向性とも呼応する極めて重要な試みであると感じました。

インクルーシブが「学校の包摂」の問題に収まらず、人がどのように生涯を通じて学び、生き、社会に参加していくかという広い射程を持つことを、あらためて認識する機会となりました。

Ⅳ. おわりに——“母性の影”を超えて、研究の射程をひらく

先生の講義は、私に「母性の影」と「インクルーシブの距離」を同時に見つめる機会を与えてくれました。インクルーシブ教育は単なる学校の中の議論ではなく、生涯にわたる学びの連続性、そして家族や支援者を含めた社会全体のまなざしの変容と不可分であることを強く感じています。

私は今後、インクルーシブ教育を「学校」という限定された領域ではなく、生涯学習と家族の学びを含む広い支援体系として捉え直し、人が生涯にわたり主体として学び続けるための条件とは何かを研究の軸に据えていきたいと考えています。

今回の講義で得た気づきは、私の研究の方向性を大きく前進させてくれるものでした。研究計画がまとまりましたら、あらためてご相談させていただければ幸いです。

深い学びと、静かな勇気を与えてくださったことに、心より感謝申し上げます。

今後ともご指導のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。